

多摩川流域市民学会
多摩川の自然 37年の変遷

多摩川の自然を守る会代表 柴田隆行

1 多摩川の自然を守る会の紹介

(1) 特徴

住民運動型自然保護団体（1970年2月結成）
身近な自然の価値 「貴重」の基準
水系の思想
感性の重視

(2) 主な活動

月例自然観察会（1972年から）
自然教育河川構想 自然そのまま博物館
自然を教えるのではなく、自然から教えられる場 多様性、可変性
多摩川利用実態調査
西暦2000年の多摩川を記録する運動
多摩川絵図鑑
多摩川歴史ガイドブック
「多摩川ちょっと待ったマップ」
その他
堤防のり面在来植生調査実施。カワラノギク・プロジェクトやツバメの集団ねぐら一斉調査に参加。

(3) 自然観察記録の大切さ

継続性 過去は取り戻せない
一般性 話しを聞いた人の多くがみずから経験者

2 多摩川の自然の変遷

(1) 1965年ごろまでの印象（二子橋から大田区境までの左岸）

- ・中州があって、右岸側は急流で「赤岩」があり、左岸側は小学生でも渡れた。
- ・瀬と淵があり、瀬を渡って右岸に渡り、いまの等々力緑地にあった「水郷地帯」に遊びに行った。
- ・中州には砂場があって、そこでみんながよく相撲をとった。
- ・夏は「海水浴場」のようにテントが張られ、警察官が見張りに立ち、自転車に乗ったアイスクリーム屋が来た。
- ・二子玉川下流に屋形船があった。
- ・瀬みに猫や犬の死骸がしばしば見られ、無花果浣腸がたくさん捨てられてあった（いま思うとコンドームかもしれない）。
- ・大水が出ると、本堤防の天端近くまで水が上がり、堤防上から物干し竿を釣り竿にして魚を釣った。水が引くと、あちこちに池ができて、四つ手網で魚をたくさん掬った。そのとき採れたのはクチボソ（モツゴ）が一番多かった。
- ・東急ゴルフ場が両岸に出来て、一帯が全面立入禁止となり、川遊びに行くと近づくと、「バカヤロー」と怒鳴られた。それ以来ゴルファー一般が嫌いになった。

・東京オリンピックが開かれた頃に一挙に川が汚くなって、上流の砧の浄水場付近まで行かないと泳げなくなった。

(2) 1970年以後の自然の変遷例

野鳥

カワウ

いまや一度に数百羽の大群を観察することがあるほど多摩川では多く見られ、漁業関係者に甚大な被害を与えている。西暦2000年の多摩川を記録する運動の一環として調査したカワウの数は、青梅万年橋から河口までの全域で、2001年1月23日左岸330、右岸310、同4月23日左岸83、右岸147、同7月23日左岸170、右岸156、同10月22日左岸1076、右岸680、2001年1月28日(天候雪)左岸282、右岸192であった。左右両岸から同じ個体を観察している可能性が高いので、両岸の記録を足すことはできないが、かなりの数が多摩川に飛来していることがわかる。カワウが多摩川に大量に来るようになったのはそれほど昔のことではなく、私たちの記録によれば、1977年6月に狛江で観察された記録が最初であり、河口付近(78年4月、83年1月、2月)を別にすれば、次に記録があるのは84年3月の狛江である。そしてそれ以後は狛江でほぼ毎年観察されている。つまり、多摩川でカワウがふつうに観察されるようになったのは1980年代中頃からということができる。

ヤマセミ

一時期大栗川合流点で営巣しており、行けば必ず観察でき、これを写真におさめようとする望遠レンズを構えたカメラマンが行列した時期があった。生息地に近づく者も出たせいか、いまではあまり見かけない。1970年代は下奥多摩橋下流左岸にはいつもヤマセミが止まっている木があった。記録によれば、80年8月氷川、81年7月万年橋、81年8月鳩ノ巣、82年8月丹波というようにほとんど奥多摩で観察されている。90年代から下奥多摩橋から万年橋上流付近でしばしば観察されたが、カワウ除けの仕掛けがたくさん設置されたせいか、めったに見られなくなった。

ハクセキレイ

多摩川ではかつて冬鳥だったが、最近は関東地方でもごくふつうに繁殖するようになった。繁殖期における観察記録としては1977年6月12日の和泉多摩川、1981年6月21日の狛江、1983年6月12日の河口などが挙げられ、これ以後多数あることから、多摩川で繁殖が定着したのは1980年代始め頃からと思われる。

ヒメアマツバメ

かつて多摩川ではめったに見られなかったが、いまではごくふつうに見られる。記録によると、1978年8月上旬の是政での初登場以来、1980年以降はほぼ周年にわたって記録が認められ、いまでは冬にも観察できる。

籠抜け鳥

1970年代狛江から調布の多摩川では冬になると多くの籠抜け鳥を観察できた。最も多いのがベニスズメで、ほかにギンパラ、キンパラ、ヘキチョウ、カエデチョウなどもしばしば観察できた。等々力溪谷や多摩川台公園などでは、70年から現在に至るまでワカケホンセイインコやダルマインコなど大型のインコ類を見ることができ、多摩川の河原ではめったに見かけない。数年前から増えたのがガビチョウとその仲間、福生から奥多摩の溪谷まで広く分布する。

野草

カワラノギク

いまでは絶滅危惧種になったが、かつては、羽村阿蘇神社対岸の大多摩観光総合運動場付近にカワラノギクの大群落があり、そこを運動場管理者が除草剤を撒いたりしていたので抗議したことがある。ここはいま1本もない。次に大きな群落があるのは羽村大橋下流右岸だが、ここも絶滅寸前である。比較的多く自生株が残っている場

所が他に一箇所あるが公開できない。関戸橋下流右岸、大栗川合流点手前の高水敷にも群落があった。78年12月、79年10月、12月、80年12月の記録がある。80年に多摩市が大栗川合流点付近に野球場を建設することになり、1月下旬に河川管理者である建設省京浜工事事務所長にも参加していただいて現地で話し合い会を開いたりして反対した。野球場建設そのものは中止となったが、多摩市は関戸橋から大栗川合流点までの高水敷に遊歩道を設け、堤防先端に野鳥観察小屋などを建設した。この遊歩道建設と低水護岸工事でこのカワラノギクは絶滅した。このほかに、浅川合流点付近の多摩川の河川敷にも大きな群落があったが、モトクロスとラジコン飛行基地、そして増水のために絶滅した。おそらくここから運ばれたタネが左岸に根付き、現在府中四谷橋がかかっている付近に1万株を越えるカワラノギクの群落があったが、橋の建設で半減したのち、私たちの人工撒種の甲斐もなく3度の洪水で絶滅した。永田地区で、河川生態学術研究会多摩川グループがカワラノギクの保全活動を実施しており、私たちの会もそれに参加している。

カワラニガナ

レッドデータブックに載っているカワラニガナは、花期が長いこともあって、洪水で丸石河原が頻繁に現れたり流出してもしぶとく生き残っている。記憶に残る最も下流の群落は是政橋下流左岸で、東京都が橋の架替工事をする際にこの群落を守るため都に協力してもらったことがある。丸石河原が大水でしょっちゅう洗われる上流もカワラニガナは見られず、青梅万年橋上流がいまわかっているかぎり最上流である。

カワラハハコ

多摩川にかぎって言えば、カワラノギク以上に絶滅のおそれがあるのが、カワラハハコである。いま現存が確認できるのは2箇所である。

カワラナデシコ

かつて中央線鉄橋下左岸にカワラナデシコの群落があったが、立川市が「日本タンポポ園」なる名称の人工公園を造ったために絶滅した。しかもこの公園は造成した翌年の洪水ですべて流出した。76年6月以降現在に至るまで記録が続いており、いまあるところにはそれなりにたくさんあるが、場所は言えない。

カワラサイコ

河原特有の植物だが、これはかなりしぶとく繁殖しており、狛江より上流ではふつうに観察できるが、上流は羽村あたりまでである。

カワヂシャ

75年6月以来96年3月まで記録が残っているが、いまでもしばしば見かける。数年前から水辺に圧倒的数量で見られるのは外来種のおオカワヂシャである。

タコノアシ

花やタネがつく形が蛸の足に似ているのでこの名があるが、確かに足が生えているかのようにあちこちに出没する。比較的長く見られたのは永田地区にある小さな水たまりだったが、2001年の洪水で泥に埋まって絶滅した。いまでも10箇所ほどで存在が確認できる。

ウラギク

河口付近の汽水地域に生えるウラギクは自然の変化に影響されやすく、かつて群落が見られた大師橋下流右岸は土砂が堆積して激滅した。六郷橋上流左岸で地元の人たちにより守られていたが、ホームレス・ホームが建ち並んで絶滅寸前である。

その他

記録集を見て懐かしく思い出される植物にクララがある。外国の女の子の名前みたいだが、毒があって食べると頭がクラクラするのが名前の由来とか。75年6月と80年6月の記録しか文字としては残っていないが、当時上河原堰左岸に行けば必ず見られる大きな株があった。最近では全然見かけないと思っていたが、昨年初夏に訪れたら健在だった。しかしいま堰の基盤改良工事で移植中である。

ゴキツルも調布地先の河原でたくさん見られたが、いまは絶滅危惧種に指定されている。80年代に猛威をふるったアレチウリは度重なる洪水のおかげでだいぶ減ったと思ったが、一昨年から激増している。

水辺は洪水や護岸工事の影響をもろに受けるので、ミクリやカンエンガヤツリなどは激減、ウキクサ類やホテイアオイの消長も激しく変化している。土手ではレンリソウやナンテンハギ、ウマノスズクサなどが減った。日本在来のオドリコソウも79年5月に下奥多摩橋下流右岸、83年4月の小宮地先に記録がある。下奥多摩橋下流右岸にいまも残るニセアカシアの林は、隣接する崖と一帯となって多くの在来植物が見られたが、崖上の土地が造成され、河原は増水で洗われて、いまは特記するものは何もない。代わりに増えたのがセリバヒエンソウで、かつてはきわめて珍しかった。記録によれば、79年4月万年橋、同5月下奥多摩橋から始まり、83年5月に睦橋付近まで下がり、しだいに下流方向に分布域を広げている。いまや上流の御獄溪谷でもたくさん見られる。府中付近ではコゴメバオトギリが猛烈に増え続けていたが、最近勢いが止まった。

鳴く虫

アオマツムシ

最初の記録は78年11月に見られ、当時は珍しくみんなで聞き惚れた記憶がある。しかし年々その数が増し、いまや都心から郊外、奥多摩まで8月下旬以降アオマツムシの騒音を聞かずに済むところはない。かつては恒例の「鳴く虫を聞く会」を9月初旬に開いていたが、9月に入るとアオマツムシの声しか聞かれない状況にある。

マツムシ

チンチロリンのマツムシは、73年9月から81年9月まで狛江での記録があるが、その後聞かれない。いまは府中と日野の地先まで行かなければならない。かと言って、八王子より上流では聞くことができない。

クツワムシ

73年9月に狛江自動車教習所事務所脇の草むら、75年9月に狛江五本松前の草むらで記録されている。宿河原堰前にある横山宅での事務局会議の帰りに土手に出ると、クツワムシのにぎやかな演奏が聞こえた。二子玉川園脇の丸子川(次太夫堀)沿いでもしばしばクツワムシの演奏を耳にした。

3 最近の感想

- ・大水が出るたびに上流から大量の土や砂が流れてくる。
- ・モトクロスは減ったが、サバイバルゲーム基地とラジコン飛行機基地は増えつづけている。河川敷内の「釣り堀」も増えている。
- ・多摩川流域河川環境整備計画が策定されてから河川工事が一挙に増えた。
- ・カワラノギクを筆頭に野草を人工栽培し、自然生態系を無視して種子を配布したり散布したりする個人や団体が増え、そこからさらに種子が広まって、自生の株と混在し始めている。放流魚と同様の問題が野草でも生じている。
- ・多摩川を「利用」しようとするひとが増えた。